

ているが、間口約一〇メートル、奥行約八メートルと推測される。

『播磨鑑』には、「例年有散楽^ヲ自姫路代々御城主有御執行姫路孔雀大夫勤之」とある。高砂神社と同様に姫路藩おかかえの能役者藤本孔雀大夫が毎年能を演じた。この記述から察すると、この神社も一つの能の盛地であったと考えられる。中世の城と能の盛地の隣接関係もおもしろい。

しかし、現在では踊りや詩吟の舞台となるだけで、十年程前に謡を行つた程度である。舞台を「ノオブタイ」と呼んでいることから考えると、まだ能の舞台という意識はあるのかも知れない。

【^{米田}米田天神社の舞台】 高砂市米田町米田

この神社は『播磨鑑』によると、泊神社の古宮を移築したとなっているが、今は社殿も舞台もすべて昭和三九年の台風で倒壊したためコンクリート一式に建てかえられている。それ以前は『播磨鑑』の記述通り舞台・橋掛・楽屋があつたという。

現在では、元の能舞台の材木を使つたかと思われる再建の能舞台が在るが、床もコンクリートになっている。その間口は三・九七メートル・奥行は三・八八メートルで、奥行一・九五メートルの後座が付いている。橋掛も面影をとどめてはいる。

【^{かき}神吉八幡神社の舞台】 加古川市西神吉町宮前

この神社は『播磨鑑』に舞台・橋掛・楽屋の記述を残す妙見大明神のことである。

この舞台も昭和三九年の台風によつて倒壊したが、本殿正面に礎石が残っており、それから推測すると、舞台は間口四・五メートル、奥行三・五メートルの長方形で、後座が奥行二メートルで付いていたと考えられる。また、神社明細帳にも次のような記録がある。

舞殿 貳間

舞臺 貳間 階掛り 六間 楽屋 五間

舞台は「ノオブタイ」と呼ばれている。

『播磨鑑』には、「大国村ノ社ニモ舞臺有テ本社ニ散楽有レハ夜ミヤ此社ニテニ番勤之」とある。大国村の社については次に述べるが、この記述によると江戸時代に、この八幡神社では能を演じたことは確かである。近年では、明治一〇年（一八七七）五月一〇日に、京都から能役者が来て橋弁慶など五番の能を演じ、昭和九年に仕舞をしたのが最後になつたという。

【^{おおくに}大国八幡神社の舞台】 加古川市西神吉町大国

この神社自体は『播磨鑑』には記されてないが、前述の妙見大明神（神戸八幡神社）のところで出てくる。それによると、神吉町の八幡神社は元は、この大国村ノ社に神が鎮座していたのが、後に神吉に鎮座地を移されたとある。小さな村の社なのに多くの絵馬が掲げてあるのを見ても由緒のある感じがする。前述の妙見大明神のところで述べたように『播磨鑑』には、大国村の社でも演能した記述があつた。江戸時代には、神吉宮前の八幡神社と一緒に能が演じられたのであろう。

【^{しかた}志方八幡神社の舞台】 印南郡志方町

この神社は『播磨鑑』に見える志方庄の八幡宮である。小高い丘の中腹にあるこの神社には近年まで、『播磨鑑』に記述のある舞台・橋掛・楽屋が存していたが、昭和三九年の台風により倒壊。現在は、神楽殿が拝殿の左にあるだけである。

しかし、この神社にも『播磨鑑』に散楽の記述があり、江戸時代には能があつたと考えられる。

【^{おの}大野日岡神社の舞台】 加古川市加古川町大野